

## 飛躍の面白さ

杉村福郎

先日近くの古書店で、『川柳歳時記』という書名が目にとまり、手に取って開いて見ると、これがなんと『俳句歳時記』とそっくりである。

不思議に思って早速購入した。

いま机上で開いて見ている。

拙文が協会の会報に載る頃は夏だな、と勝手に想像しながら、目が夏の例句を拾う。

夏来るすこし野心をひかえ目に

紫陽花や長い手紙を書き終わる

藍染の浴衣素足にからむ風

これが川柳か、穿ちも風刺もない。俳句ではないのか。このような句について、どなたかが書かれていたような気がした。書庫を見渡してみると、それらしい一冊があった。

復本一郎著『俳句と川柳』（講談社現代新書）。副題が「笑い」と「切れ」の考え方、たのしみ方とある。ここに書かれていた。

「一部の俳人や川柳作者が、両手を挙げて容認しようとしている『俳柳一如』といった鶴（ぬえ）のごとき文芸など望んでいないのである」。ということは、俳句のような川柳を作っている流派があるのだ。

俳句と川柳の違いを挙げて峻別する方と、その間に線引きしない方がおられる。

復本先生は峻別派のお一人で、先ほどの著書では「飛躍切部」論を主張されている。

作句の勉強に、このご説を自分なりに復習してみることにした。

「飛躍切部」という耳馴れない用語は、復本先生の造語であろう。先生は俳句の構造を切字や切れという「点」で考えないで、首部と飛躍切部の二つの「部分」でとらえる。

例えば、女性俳人の裸の句で恐縮だが、

" ぎりぎりの裸である時も 貴族 "

未知子

A

B

Aが首部でBが飛躍切部。この句はAとBの落差が大きく、日常から非日常への飛躍の意外性に「笑い」がある、と先生は読む。

---

そのほか引用句のなかから、「笑い」のある句を選んでみる。

(下線はBの飛躍切部)

冬紅葉 むしのまだ喰ふ歯を持てる 展宏

塞の神幹にくくられ 春惜しむ 宗也

青き踏む ブレスレットを放り投げ 翔

点でみると、四句とも代表的な切字はない。

この人の欠点はただ自慢ぐせ たけし

ご意見はともかく灰が落ちますよ 猪突

A 4で四五枚ほどの恋心 乱魚

上の三句はいずれも川柳。面白さが読者にストレートに伝わる。川柳には「切れ」はない。もちろん飛躍切部によって、「笑い」を誘発するような二重構造の句など

---

はない。

滑稽俳句を作る時、川柳と一線を画するなら、この手法は参考になると思う。

復本先生の著書のさわりの部分を、自己流に簡略化してしまったので、どうも舌  
足らずの観がある。同書を読むに如かずである。